

松ヶ崎堀割①

■阿賀野川の水を日本海に流す

享保15（1730）年、松ヶ崎浜地内に、松ヶ崎堀割が開削されました。これが現在の阿賀野川の河口部です。この堀割開削のきっかけとなったのは、紫雲寺潟（塩津潟）の干拓工事でした。

紫雲寺潟の干拓工事は、潟に流れ込む境川を締め切る計画でしたが、境川を締め切ると、大雨の際には加治川流域一帯が洪水となってしまいます。新発田藩は増水した分を阿賀野川からすばやく海に流すために松ヶ崎浜地内に堀割をつくる計画を立て、幕府の許可を得ました。

この工事には、新潟町が強く反対しました。当時、新潟湊には信濃川と阿賀野川が流れ込んでおり、阿賀野川が直接海に流れ込むようになれば、湊が浅くなって船が入れなくなるという理由からでした。しかし、阿賀野川が増水した分だけ海へ流す、堀割が破壊されたらすぐに復旧する、堀割は湊にはしないという条件で、新潟町は押し切られることとなりました。



松ヶ崎堀割掘削予定地

（享保14年「松ヶ崎悪水吐目論見候節村々相記し候絵図」 個人蔵、一部加筆）

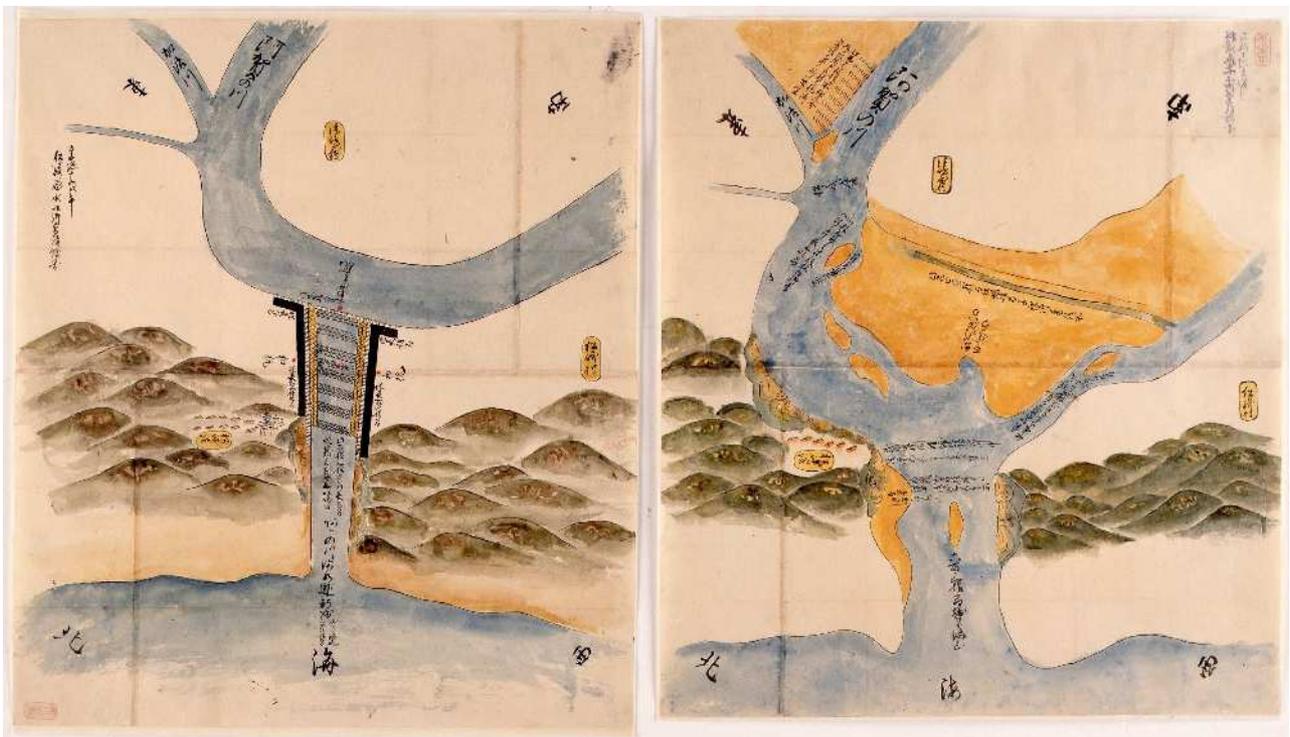
松ヶ崎堀割②

■抜けちゃった阿賀野川

享保15（1730）年の8月から11月にかけて、幕府の監督のもとで、新発田藩が松ヶ崎堀割の開削工事を実施しました。堀割の全長は385間（約693m）、工事にかかった費用は700両余、人足は新発田藩領だけで、のべ11万5600人余に達する大工事でした。

しかし、完成した松ヶ崎堀割は、翌年春の雪解け水による洪水で決壊し、阿賀野川の本流となってしまいました。新潟町はすぐに復旧工事を要求しましたが、決壊した堀割の幅は160間（約288m）から200間（約360m）まで広がり、堀割の修復は不可能でした。松ヶ崎堀割が決壊した結果、水深が浅くなった新潟湊は船の出入りに支障が出るようになり、のちの新潟開港にも影響を与えることとなりました。

一方、福島潟周辺では排水が進んで新田開発が進み、葛塚をはじめ多くの村が成立することとなりました。



完成した松ヶ崎堀割（左）と決壊後の堀割の様子（右）

（左図：享保15年「松ヶ崎悪水御普請絵図」、右図：年不詳「松ヶ崎悪水御普請絵図 所段々川欠成り」 ともに当館所蔵）